資料3
「2030 デジタル・ライブラリー」推進に関する検討会
（第 13 回）R8.3.2

大学図書館における AI への対応に係る検討について（案）

【前提】

○　AI の利活用にはプラスの面とマイナスの面があるが、大学の教育研究活動にも浸透してきている状況を踏まえると、マイナスの面を気にしすぎて過度に慎重になるのではなく、大学図書館も AI をどのように使っていくかを能動的に考えていくことが重要。

【主な観点例】

○　各項目におけるこれまでの意見を要約し追記（話題提供者および委員名は敬称略）

（１）AI 時代における大学図書館

１　AI 時代における大学図書館の役割とは何か。

＜これまでの主な意見＞

・図書館は最先端の、AI を含めたデジタルサービスの提供窓口としての機能も有するべき。非日常・AI から切り離された場としての価値も残る。（第 11 回：内田）

・図書館は生成 AI の時代においても、やはり信頼できる情報源となっているというところが一番キー（第 11 回：尾上）

・大学経営という観点から図書館の価値を何らかの形で見える化し、示せる指標があることは重要（第 11 回：松原）

・「良質なコンテンツのホルダー」としての役割を強化し、AI 時代でも一次コンテンツ提供者としての責務と優位性（第 12 回：大向）

２　今後、大学で AI の利活用によって行われる教職員・学生向けサービスの中で大学図書館はどのような役割・機能を果たしていくことが求められるか。

＜これまでの主な意見＞

・学生等が図書館に抱く期待を把握して、それをサポートしていくということが重要。また研究プロセス変革への即応や、研究プロセス変革への即応とそれに係る連携等。（第 11 回：尾上）

・AI を活用した蔵書探索や文献探索等の高度化を通じ、学習者に最適な学びを支援する役割（第 12 回：野末、大向）

・まだ AI が取り込んでいないデータ、ここにしかないデータ、あるいは新しくデータを生み出すシステムというのはどう作っていかなければいけないのかというところに図書館がコミットしていくのも、また非常に重要なアクションになる（第 12 回：大向）

３　AI の利活用が、大学図書館間の連携にどのように寄与するか。

＜これまでの主な意見＞

・目録業務の AI 化などは他大学との連携というところ（第 11 回：尾上）

・コンテンツ提供やデジタル化・メタデータ整備を通じ、共同利用モデルや外部 AI サービスで相互補完的な連携が可能（第 12 回：野末）

・図書館が築いてきた非常に広範な人的なネットワーク、各大学の構成員とのネッ

トワークというのが非常に大きな力を発揮する（第 12 回：大向）

４　AI が教育研究活動や社会活動に急速に浸透してきている状況を踏まえて、デジタル・ライブラリー像を修正すべき点等はあるか。

＜これまでの主な意見＞

・AI 活用による RAG にしても、全ての大学図書館で同じ書籍を使ってつくるもののほうがいいのか、多様な「デジタル・ライブラリー」が並列したほうがいいのか（第 11 回：日向）

（２）大学図書館のサービス業務・管理運営業務への AI 利活用

１　AI の利活用により、どのようなサービス業務や管理運営業務で、効率化や高度化が見込まれるか。また、どのようなサービスが新たに創出できるのか。

＜これまでの主な意見＞

・企画立案のほかキャプションやイラストの作成、レファレンスサービスや目録業務の AI 化（第 11 回：尾上）

・AI そのものも資料（知識資源）としての貸し出しやサービス提供（第 11 回：内田、石田）

２　AI の利活用になじまない、あるいは AI 技術を利活用しても効率化や高度化が見込めないサービス業務や管理運営業務は、どのようなものがあるか。

＜これまでの主な意見＞

・著作権等の制度や制約に対しての対応。（第 11 回：内田、小山）

・利用者との対話的・教育的な支援や、専門的判断を伴う質的評価等は AI に全面委任しにくく、人の介在が重要。（第 12 回：大向ほか）

（３）AI に対する大学図書館の貢献

１　AI 基盤モデルの高度化のために、大学図書館はどのような貢献ができるのか。

＜これまでの主な意見＞

・所蔵図書の内容がデジタルコンテンツ化できているとすれば、それを使った RAG を組み立ててやることで、信頼の置けるエビデンスが根拠となった生成 AI がきっとできる（第 11 回：内田）

・大学や学術分野ごとの共通性のあるコレクションポリシーと、それらをもとにしたコレクション構築（第 11 回：日向）

・AI に与えるテキストや言葉に対する印象や感受性についての教育、育成（第 11 回：小山）

・図書館が保有する高品質な日本語・多言語コンテンツや構造化メタデータが、学習データとして基盤モデルの品質向上に寄与可能（第 12 回：大向、松原）

２　教職員や学生の AI リテラシー向上のために、大学図書館はどのような役割を果たすことができるのか。

＜これまでの主な意見＞

・AI リテラシー教育において、体系化したカリキュラムや育成の仕組みにどのような要素を組み込むか（第 11 回：西岡）

・大学図書館に対する期待は学内でもあるため、AI リテラシー教育へのコミットが重要（第 11 回：内田）
・図書館員と教職員・学生との協働による利用支援・教育コンテンツ提供（第 12 回：大向）

（4）AI 時代における大学図書館職員

1　AI 時代において、学習支援や研究支援に携わる大学図書館職員像とはどのようなものか。

＜これまでの主な意見＞

・大学は新しい知識が生み出されている場であり、これまで大学図書館は意識していなかったが集めなければならないものがたくさん生み出されており、それらを使えるようにしていくということが大きな仕事になっていく（第 11 回：竹内）
・サービス実装と利用者支援の両面をつなぐ「インタープリター」的役割（仕組み理解者と現場支援者を兼ねる人材）（第 12 回：大向）

2　AI を利活用したサービス業務や管理運営業務において、当該業務に従事する職員には、どのような知識・スキルが必要になると考えられるか。

＜これまでの主な意見＞

・健全な知を守るスキル。知識の保存と再利用は図書館員に任された使命かもしれない（第 11 回：内田）
・ AI の基本理解、領域別の学修・研究プロセス理解、メタデータやデジタル化技術の知見、仕組みを利用者に説明できる能力（第 12 回：大向ほか）

3　AI 時代におけるデータ・キュレーター等の研究データマネジメント業務において、大学図書館職員はどのような役割で貢献できるか。そのために、どのような知識・スキルが必要になると考えられるか。

＜これまでの主な意見＞

・多言語目録管理や資料のテキスト化・構造化、研究データの整備・公開支援を通じて研究データマネジメントに貢献（第 12 回：大向、松原）
・図書館が築いてきた非常に広範な人的なネットワーク、各大学の構成員とのネットワークというのが非常に大きな力を発揮する（第 12 回：大向）

4　その他、AI の急速な浸透に伴い、新たに期待される業務は何か。

＜これまでの主な意見＞

・ AI を組み込んだサービスの設計・運用、外部 AI との連携管理、利用者への継続的な説明・教育（第 12 回：野末、大向）。